

学校入脈

山崎高校編

4

検察と公共放送

取材帰りの部下が、思いがけないことを言った。

「今度の東京高検刑事部長、山崎高校の先輩ですよ」

NHK副会長の堂元光(68)は山崎高校出身で、元福岡高検検事長の有田知徳(71)は同18回生を知ったのは、そんな職場の雑談がきっかけだったという。堂元は当時、政治部長。検察と公共放送という立場を超え、気の置けない交流が始まった。

□

堂元は1974年NHK入局。九州の警察担当などを経て、6年目から政治記者の道歩んだ。首相官邸キャップだった93年には宮沢政権への不信案を機に自民党が分裂・下野し、同党が与党の座を38年間守った「55年体制」が崩壊した。従来は同党の主要派閥を取材すれば政策も政局も把握できた。だが8

党派が集まった細川連立政権では過去の常識が通用しない。どこを押さえれば情報が入るのか、手探りの日々が続いた。

「結局『困った時はサツ回り(警察担当)に帰れ』なんだよ。要は人間を取材する。相手といかに信頼関係を築けるか、だな」

思い通りにいかなかったと振り返るが、歴史の転換点だった1年の激務を果たし、後に政治部長に昇進。報道局長や大阪放送局長などを経て、2014年に生え抜き職員トップの副会長に上り詰めた。

一方の有田も74年に検事任官。東京地検特捜部副部長の95年には、信用組合が不正融資した二信組事件で元労働大臣を取り調べた。出頭した元大臣は、逮捕状が届く前に議員バッジを外し、有田に渡そうとした。



夏は毎年山崎に帰り、今も指保川で水浴びをするという堂元。「川面から子ども時代と同じ山並みを見ると、次の1年も頑張る気力が湧く」(撮影・小林良多)

仕事離れ安らく交流



数々の難事件を解決した有田。趣味の釣りでは八丈島などにも遠征し、日曜大工では5年かけて山梨県の南アルプス山麓に小屋を1軒建てた。いずれも神戸新聞姫路本社

「あなたは遠慮ですよ。自分の立場をよく考えたらいいかがですか」。バッジを押し返し、逮捕後も報道陣の前では手錠をかけず、ネクタイ着用を許した。

有田は「相手が誰であれ、犯罪者にも気を配るのが僕の流儀」と言う。検事の使命は真相を聞き出し、証拠を固め、起訴・不起訴を判断すること。自由に導く7割は証拠だが、3割は検事の人間性が左右する。小さなきつかけで犯罪の道に進んでしまった相手への情を忘れなかった。

その後も捜査畑一筋に歩み、世間の注目を集める大事件を数多く指揮。高松、仙台、福岡の各高検トップを歴任した。現在は弁護士として、上場企業の社外役員や福島第一原発事故で強制起訴された東京電力経営陣の弁護人などを務める。

□

検事の交友関係について有田は「人脈を築くのは有害。癒着を招く」と言う。法の執行者として孤高を貫いたが、「失業のばか話だけでいい」堂元は一息つける存在だった。堂元も有田と会う場には仕事を持ち込まない。「田舎の高校を出て、大都会で同じ故郷の話ができる。心が洗われますな」。大河ドラマが矢張り「軍師官兵衛」に決まった時は2人で盛り上がったという。

堂元は副会長2期目の任期が来年2月で終わる。12年ぶりの職員出身会長を期待する声も強いとされるが「改革には外の空気が必要。外部出身が10期は続かない」と意に介さない。「退職したら山崎に帰る。これが長年の夢」と憂快に笑った。

敬称略
(古根川淳也)